

ゆうこみやき。



なるほどアイヌ文化トーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で語り合います。



今月のテーマ **ニカブ(樹皮)**



イラスト/安田千夏

ハルニレの皮をニカブ(ニレ木、カブ皮)といいます。樹皮全般を指す言葉でもあるよね。

先日、ネイティブアメリカンのバスケット編みの伝承者がアイヌのサラニラ(編み袋)づくりを見たいと来館され、シナノキの樹皮を編む作業を熱心に見学しました。バスケット編みのワークシヨップも開いて頂いて、木の枝から樹皮を剥いて糸を撚る実演をしてもらいましたが、熟練の手技、圧巻でしたよ。

樹皮は、サラニラやアットウシ(樹皮衣)、ゴザ編みの糸などアイヌの道具づくりには欠かせない素材。樹皮を剥ぐ時期は、幹に水が上がる春から初夏にかけてが一番といわれていて、時期が遅くなると皮が剥がれづらくなるし、温泉や湖沼に浸けて加工しても良い繊維とれないんだよね。でも、シナノキは別で年中剥ぐことができるんだって。「(父親が)昔、入植した人の家を使う縄をシナでつくって売ったの。冬でもシナの皮剥いできて炉縁で縄ないしてたもんだ」って平取のおばあちゃんの話。シナノキはオヒヨウやハルニレよりも繊維が強いので縄にうつつけ！水がかかっても切れず丈夫なので漁網の材としても使ったんだって。

アイヌ文化の中で樹皮は、その特質によってさまざまに加工され利用されてきましたよね。



東北にも同じようにシナノキの内皮を使った「マダ布」があるよね。加工法が異なるからか風合いや手触りも全然違ってびっくり。シナノキに似たオオバダイジュからも上質の繊維がとれます。樹皮に限らず日本列島ではいろんな植物繊維で布が織られていて、たとえば福島県昭和村のカラムシ(ハナヅク)・イラクサ科)なども有名。新潟にはアットウシそっくりのフジの繊維の衣服があります。

十年ほど前、静岡県掛川市にあるクス布の工房をお訪ねし、そのしなやかさと柔らかな光沢に魅せられました。でも、クスの繊維から糸を作って織り上げる作業は本当に手間がかかるだけに決してお安い品ではなく、その時の私の財布事情では小ぶりのテーブルクロスが一杯。なのに、工房を見学させていただくと、そこではたくさんの方々たちがバワフルに布を織つたの。思わず「こんなに雇用できるほど売れるんですか?」と訊いたら、数年前にアメリカの展示会に出品して以来、カーテン生地としての需要が多く、生産が追いつかないんですよ。

2013年、「二風谷アットウシ」が北海道初めて経済産業省の「伝統的工芸品」として認定された時は、拍手して喜んだけど、まだまだ産業として確立されるとは言い難い現状。みんなでもっと知恵を絞らないとね。



- 本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
- 村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民アイヌの一員として文化継承活動に努める。
- 安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。日本口承文芸学会会員。趣味が高じて本連載の挿絵を担当。